2204　離島覚書（宮城県・田代島）

金華山山頂より田代島を望む

令和４年４月 24 日

ネコ見客

田代島は、旧北上川河口の南東、17 ㎞ほどに位置する。面積 2.94 ㎞^{2}、周囲 11.5 ㎞で、島の東岸の北部に大泊、南部に仁斗田（にとだ）という２つの集落がある。

1889（明治 22）年の町村制施行時に牡鹿郡荻浜村に属していたが、1955（昭和 30）年に石巻市に編入されて現在に至る。2020（令和２）年の国勢調査時の人口は 43 人、世帯数は 29 戸であった。島の人口のピークは石巻市に編入された 1955（昭和 30）年の 1,097 人であったから、減少率は際立っている。

田代島には、網地島（あじしま）ライン㈱が運航する定期船が石巻港から日に３便通っている。島の２つの集落を経由して、さらに網地島を経て牡鹿半島の鮎川に至る。「シーキャット」（109 トン、定員 220 名）と「マーメイドⅡ」（113 トン、定員 231 名）という２隻が交互に運航されている。石巻駅から歩いて 20 分ほどの旧北上川河口に「石巻中央」という乗り場があり、さらに下った「門脇」にもう一つの乗り場がある。

石巻グランドホテルから歩いて石巻中央の船着場に行く。3.11 の津波は旧北上川を駆け上がり、大きな被害をもたらしたことから、両岸には高い防潮堤が築かれていた。防潮堤の内側には「いしのまき元気いちば」という地元産品のマーケットや「友福丸」というアナゴ料理を売りとする飲食店がある。階段を登って防波堤の上に出た先が船の乗り場で、９時発の「シーキャット」に乗船した。

日曜日だったせいか、コロナ禍にもかかわらず 50 人ほどが乗り込んだ。ほとんどが若い男女である。続いて門脇という橋のたもとにある船着場でさらに大勢の若い人達が乗り込み、新型コロナ対策でスペースを開けた席以外はほぼ埋まった。この乗客の目的は田代島の

ネコであり、いわゆるネコ見客なのだ。

９時 35 分ごろ、田代島の最初の停泊地・大泊漁港（第１種）に着いた。ネコ見客の 25 人ほど下船し、早速、ネコを見るために散逸していった。ネコ見客は、ネコと戯れながら、途中、ネコ神社にお参りし、「島のえき」でネコグッズを買い、島を縦断して仁斗田から船に乗って石巻に戻るという行動パターンである。また逆のコースを歩く人もいる。

ネコが観光資源になっている島は、瀬戸内海の手島、青島、豊後水道の深島、響灘の藍島などけっこう多い。何れも過疎と高齢化が進み、人よりもネコの方が多くなった島だ。人が減少すれば餌がもらえなくなるのでネコの繁殖は抑制されるはずだが、外から観光客がやって来て餌を与えるので、豊富な餌のもとでネコは増え続けることになる。過疎の島ではネコは貴重な観光資源にもなっているが、一方でネコはいたるところで糞をするからその臭いを気にする人や猫が嫌いな島民もいて、その調整が難しい。ネコの数が異常に増えたため、ボランティアの獣医師の協力を得て、避妊手術をする島も現れている。

旧北上川河口の発着場に係留されているシーキャット（左）、ネコにふれるネコ見客（右）

大泊

大泊漁港内には船外機が５隻あり、うち２隻は海面係留、残りの３隻は陸置きであった。漁港内で漁船１隻が何やら作業をしていたが、これを除くと全て船外機で、大泊地区の漁業は採貝藻を中心とする磯根漁業が主体であることを想像させる。

大泊は漁港背後の谷あいに形成された集落である。北西側は山で遮られているので、冬季の季節風の影響を受けず、比較的穏やかである。漁港から谷あいに沿って階段状に家が 10 数軒並ぶ。

3. 11 の津波の波高は５ｍほどだったようだが、漁港のすぐ近くの低い土地にあった 11 軒の建物が破壊された。このうち人が住んでいた家が５軒、空き家が６軒であった。その後、家屋の瓦礫は撤去され、現在は更地の状態で放置されている。大泊の島民は、震災当日の夕方、後述する「マンガアイランド」のロッジに避難し、２週間ほど避難生活を余儀なくされたという。幸い大泊地区では１人の死者もなかった。

大泊の更地になった場所の近くに「弘法様の井戸」と呼ばれる井戸が残っている。脇に立つ案内板によると、この井戸は度重なる干ばつでも枯れることがなく、島民の命を繋いだといわれている。ただ、人手不足のせいかこの案内板は修理されることなく傾いたままだった。

2022 年３月末時点における大泊地区（字新地を含む）の住民基本台帳上の人口は 13 人、

世帯数は 10 戸であるが、後述する渡辺さんの話では、実際島に住んでいるのは 11 人で、このうち在来島民が５人、移住者（Ｉターン）が６人という内訳だという。

漁港背後にある山の登り口に石の鳥居があり、これをくぐって階段を登った先に赤く塗られた神社が置かれている。鹿嶋神社という。大泊地区の神社だが、在来島民がほとんどいなくなったためか、全く修理の手が及ばず、無残な姿をさらけ出していた。拝殿の階段は腐って崩れており、本殿に向かう通路も朽ち果てていた。後述する渡辺さんによると、茨城県の鹿嶋神宮にすでに遷座したとのことで、神様はいないという。神社の建物が崩壊するのはもはや時間の問題だろう。

大泊の集落（左）、朽ち果てた鹿嶋神社の拝殿の階段（右）

Ｉターン

船を降りて島民に会ったのは、「海遊丸」と書かれた軽トラックの運転手だけだった。

ネコ見客は早々と去り、集落は静まりかえっている。そのうち何処からともなく機械音が聞こえてきた。人がいる。急いで音の方向へ歩いて行くと、大工仕事をしている人がいた。

集落の事情を聞くべく話しかけると、「何しに来た」という。どうやら船を降りた時から上陸客を観察していたようで、私のことをネコ目的の観光客ではないとみていたようだ。「10 年前にこの島に取材に来ており、その後の様子を調べに来た」と話すと、快く応じてくれた。

彼は渡辺仁保さんといった。10 年前のメモを確認すると、実はその時に会った３人のうちの１人だった。渡辺さんは仙台で建築関係の会社を自営していたが、建築バブルがはじけた先のことを思案していた折、田代島に釣りに来て濱温（ゆたか）さんと知り合い、島での生活を選んだのであった。現在 63 歳になる。震災の年に移住してきたので、島に来て 12 年目を迎えた。釣り好きが高じて漁師になったのだが、現在は漁船を３隻保有し、アワビ・ウニを中心とする採貝藻や刺網、籠漁業を営む。本人いわく「ぼちぼち漁師」である。ヒジキなどはボイル・乾燥加工して「島のえき」などで販売しているようだ。

ちなみに濱さん（渡辺さんと同い歳の 63 歳）は田代島のＩターンの草分け的存在で、18 年前に島にやってきた。移住する前はみやぎ生協に勤め、店長をしていたが、釣り好きが高じて田代島にやってきた。網元の家を購入して「民宿はま屋」を経営するとともに、釣り船、漁師で生計を立てている。

2012 年２月に取材した当時、大泊には渡辺さんと濱さんのご夫婦の他に、２人（独身男

性）のＩターンがいたが、この２人はすでに島を去っていた。その後、地元出身の相沢さんと阿部寿さんのＵターン組が加わっている。なお、大泊地区の住民は濱さんの奥さん（50 歳代）を除くと全員 60 歳以上で、過疎と高齢化が進んだ集落なのだ。そして渡辺さんや濱さんたちのＩターンがいなければ、廃村の憂き目にあっていたのは間違いないだろう。

前回来た時と異なるのは、古い住宅を改装した「古民家カフェ福猫」ができたことだろう。このカフェはＮＰＯ法人石巻田代島しまおこし隊という組織がクラウドファンディングによって金を集めて、活動拠点として整備したものだ。ただ誰もおらず、鍵がかかっていた。帰ってから同法人のホームページを確認したが、ここ数年は更新されておらず、どうも怪しげな存在である。

Ｉターンの渡辺さん（左）、旧網元宅を活用した漁師民宿・はま屋（右）

ネコ神社

大泊集落の坂を登り、仁斗田に向かう。集落の高台に大泊地区の配水場があり、そこを過ぎてさらに歩くと、カキ殻の捨て場があった。ただし、古い殻しかないので、最近は捨てられてはいない様子である。道路脇には、ところどころに桜が植えられており、ちょうど満開であった。

海遊丸の軽トラが大泊から仁斗田に向かって走っていった。

しばらくすると、道路の左手にネコ神社が現れた。正式には美與利（みより）大明神という。石の鳥居の先に小さな社が置かれている。その前にはネコ見客が持ち込んだ「招きネコ」などのグッズ類がたくさん並べられている。社の周囲は赤く塗られた木の柵で囲われていた。

このネコ神社は阿部家（臣家（しんや））の氏神様である。阿部家は３代にわたって漁業を営み、後述するように八興漁業㈱を経営している。同社の「八興漁業 100 年の歩み」によると、美與利神社の創建は 1902（明治 35）年３月のことで、「村人等集いて猫神様を祭る」「神のお告げにより、美與利神社と尊称、神殿を建立」したとされ、建築世話人に阿部きく、阿部たけ、尾形はつ、釜石大網、正島大網（大網は定置網の組織）が名を連ねている。

神社の脇の解説版には、「いかりを作るため砕石をしていた時、その石片が飛び散り、猫を直撃し瀕死の重傷を負わせるという事故があった。古くより島では、“漁をまねく”“大漁をまねく”と言って、誰もが猫を大事にしていたことから、当時、大謀（総監督）の任にありました現八興丸船主安部家（ママ）では大変心を痛め、今後の猫の安全と大漁を祈願して、石造りの小祠を安置し、猫を祀猫神様として信仰を深めていった」と書かれている。阿部を安部と

誤記しているところをみると、阿部家が書いたものではなく、第３者によるものだろう。

この解説は同社の社史によると、実際とは異なるようだ。建立の由来は八興漁業の創業者・阿部八兵衛の長兄である阿部周作の次弟・作治（創業者の兄に相当、八兵衛は６男２女の６男だった）が幼少のころ、子猫へ投石しケガを負わせた後、原因不明の脚の病に罹り、祈祷師に拝んでもらったところ、ケガをした子猫の祟りであるから、鎮魂のため社を造ってお祀りすべしとのご宣託があったのが真相らしい。しかし、同社社長の阿部達男氏（私の大学の同級生）によると、実際の話はあまり一般受けしないので、ネコは大漁を招くという作り話を敢えて否定しなかったとのことだ。

この神社はもともと阿部行雄氏の自宅敷地内に置かれていたが、1933（昭和８）年に現在地に移築されている。

なお、田代島では蚕を飼っていた時代に蚕を食べるネズミを駆除するために各家でネコを飼っていた、あるいは米や穀物を家の中に収納することが多くやはりネズミの駆除のためにネコが飼われていたから、島では昔から実際にネコを大切にしていたのは間違いない。

道路の脇に置かれたネコ神社（左）、ネコ神社には様々なネコグッズが供えられている（右）

島のえき

ネコ神社の少し先に「島のえき」が置かれている。ちょうど大泊と仁斗田のほぼ中間あたりに相当する。ここはもともと小学校と中学校が置かれていた場所だ。島では２つの集落のちょうど中間あたりに学校がつくられることはよくあることで、田代島も例外ではなかった。

田代島の学校教育は 1872（明治５）年に始まった。仁斗田地区に田代小学校、大泊地区に大泊分教場が置かれたのである。1927（昭和２）年に両校は統合され、戦後、荻浜村立田代小学校と改称された。一方、田代中学校は 1947（昭和 22）年に荻浜中学校田代分校として開校し、翌年田代中学校として独立した。

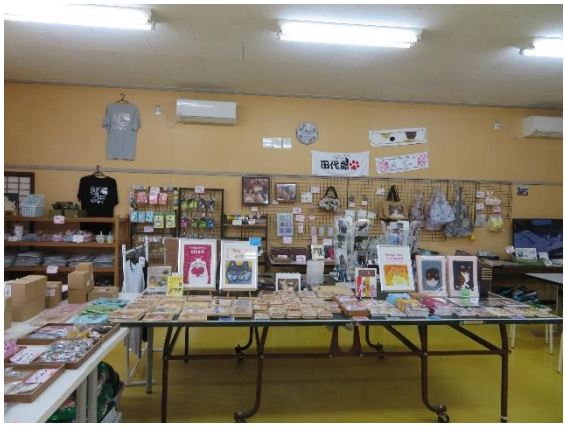
児童数が最も多かったのは 1945（昭和 20）年の 210 人であったが、1972（昭和 47）年に 100 人を下回ると、急速に減少した。なお中学校の生徒数は 1949（昭和 24）年の 81 人がピークであった。その後、児童・生徒の在籍者数が激減したため、1888（昭和 63）年に小中校併設となり、翌年３月に閉校になった。島に子供がいなくなってすでに四半世紀が経とうとしている。なお、後述するように団塊の世代が小中学生に入学するころには本土側への移住が始まっていたから、島の児童・生徒数のピークは団塊の世代と重ならない。

小学校の跡地は自然教育センターとして活用されていたが、2017（平成 29）年９月から「島のえき」に衣替えして、５年目を迎える。震災復興が進み、ネコ見の観光客が島を訪れるようになったことから飲食や物販の需要が高まり、事業の採算がとれると踏んだのだろう。ちなみにコロナ禍以前の 2017（平成 29）年度の観光客数は約２万人であった。

この施設は、当初「一般社団法人田代島にゃんこ共和国」が経営していたが、今年の４月から個人経営（島外の業者）に移行している。なお、旧校庭は島では数少ない広い平地があることから、ヘリポートが整備されている。

「島のえき」には食堂と売店があり、売店ではネコ関連の様々なグッズ類が売られている。ネコの餌も売られているので、建物の周辺には餌待ちの猫がたむろしている。

食堂のメニューはニャンカレー（880 円）、牛丼（600 円）、中華丼（600 円）、きつねうどん（600 円）、フランクフルト（200 円）の軽食で、ビール、コーヒー、紅茶、ジャスミン茶、オレンジジュースなどの飲み物もある。少し早いが、ここでニャンカレーを食べる。カレーに猫の形をした人参がのせてあり、これがどうやら命名の由来のようだ。ネコ関連グッズの他に、島の特産品のヒジキなども売られ、時期には塩ウニも並ぶようだ。



食堂と売店のある建物（左）、様々なネコ関連グッズが並ぶ店内（右）

仁斗田

「島のえき」の隣は旧中学校の敷地、そこから先は下り坂になった。集落に近づくと、畑にビニールシートを敷いてヒジキを干す家が１軒あったが、あたりには草木に埋もれた廃屋が散見される。かつてこの付近にもたくさん家があったようだ。この高台の一帯は仁斗田地区の内山という字に相当する。

やがて道が開けて「阿部ツ商店」と看板がかかった家が現れた。店は閉まっているので明らかに営業はしていないが、人が住んでいるかどうかも怪しい。道路を隔てた対面の家は雨戸もなく放置されたままで、畳は撤去され、床板は剝がされていた。ここから海にかけての斜面に仁斗田の集落が形成されている。

仁斗田の集落は大泊よりも古く、11 世紀から 12 世紀にかけて形成されたとされている。先住土着の民（アイヌ族）と外来者の対立、融和によって発展して来たらしい。1909（明治 42）年には大火に見舞われ、57 軒の住宅が焼失している。

仁斗田地区（内山と敷島の字を含む）の 2022 年３月末時点における住基台帳上の人口は 41 人、世帯数は 30 戸であった。仁戸田漁港の前に建つ開発総合センターには仁斗田地区の

島民の班編成表と名簿が置かれていたが、それによると、仁斗田は８班編成で、世帯数は 26 戸であった。したがって実際に島に常時住んでいるのは 26 世帯なのだろう。名簿から判断すると、このうち 80 歳を過ぎたおばあさんの単身世帯が５戸を占める。

10 年前に調査した時は、仁斗田地区にはＩターンが８世帯いたが、そのうち６世帯はすでに島外に去り、当時から残っているのは石川祐太さんと林良次さんの２世帯だけとなっていた。その後新たに、民宿マリンライフやクロネコ堂を経営する人などが加わり、現時点でＩターンは６～７世帯に及ぶようだ。明らかに田代島の在来島民と思われる阿部姓は６戸、尾形姓が５戸、津田姓が２戸であった。ちなみに仁斗田地区の区長、会計などの役員は全員Ｉターンである。地元の人は歳をとって役をする人がいなくなった。

ただ、生まれ育った島に愛着があり、体を動かせる限りは島に残りたいと思っている老人が多い。いよいよ１人での生活が難しくなると、本土側の子供の家や施設に移るようだ。

集落の坂を下っていくと、10 年前に泊まった民宿網元の看板がでていた。ご主人は若いころ、マグロ延縄漁船に乗っていたが、船を降りてから島で小漁師とカキ養殖、そして民宿を兼業していた。しかし歳をとったため、民宿をやめていた。

島を離れた人は墓を石巻に改葬している人がほとんどで、集落背後にある満福寺の裏手の墓地にある墓石はそのほとんどが倒されていた。島に墓を残している家は３～４戸しかないという。法事の時などは石巻から坊さんが来るらしい。

廃屋（左）、改葬された墓の跡（右）

遠洋近海漁業の島

田代島は石巻湾の入口に位置し、牡鹿半島先端の金華山とは 20 ㎞も離れていない。

南から北上する黒潮は金華山で北東に進路を変え、北からは親潮系水が南下してくる。暖流と寒流が交錯する日本屈指の好漁場に田代島は位置している。魚は黙っていても岸に寄って来るとはよくいったもので、石巻湾に回遊してきたマグロやカツオは田代島や網地島と牡鹿半島の海峡を抜けて外海に向かった。

こうした立地条件から田代島は歴史的に漁業が盛んであった。16 世紀末には大謀網と呼ばれる定置網が開発され、江戸時代から明治期にかけては大いに栄えた。阿部勇雄氏が書かれた「田代島むかしむかし」によると、年代は明らかではないが、和良美、正島、釜石の３つの大型定置網があった。少し時代が異なるが４つの大網があったこともある。この定置網はいわゆる村張りで、集落の人々が出資する地域共同経営であった。したがって大網の収益

は株主に平等に配分された。和良美の大網は仁斗田 17 株、大泊 11 株で構成されていた。正島と釜石の両定置網は仁斗田の集落の人々がそれぞれ 24 株、27 株持っていた。1 株はイコール世帯数であったから、当時の世帯数は仁斗田が 68 戸、大泊が 11 戸だったと推定される。

田代島は小さな島ながら、才覚に富んだ人物が生まれている。幕末には、田代島を根拠地として樺太、蝦夷地と那珂湊を往来し、中継貿易で巨万の富を得た平塚八太夫という人物が現れている。平塚は水夫として働き、那珂湊に出て、水戸藩御用達商人の大内五郎右衛門の船に乗り、船頭となっていた。またまき網の先駆者である新田周助がおり、八興漁業の創業者の阿部八兵衛は、新田の推薦で東京公海漁業の吉祥丸に乗船し、金華山沖でまき網の実地研修を受けている。

こうした「進取の気性」を反映して、田代島の人々は明治末期からマグロやカツオを求めて沖合・遠洋漁業へとシフトしていく。ちょうどこの時期は現在の日本水産㈱やマルハニチロ㈱などの漁業資本が形成される時期にも当たっていた。そして田代島はいくたの漁業資本が形成され、「船主の島」となった。現在でも海外まき網漁業や沖合底曳網漁業で活躍する八興漁業㈱や大慶漁業㈱は、何れも田代島の出身である。

田代島の漁業の特徴は、社会環境・国際環境や水産資源の変化に対応しながら、一つの漁業に固執することなく、臨機応変に新たな漁業にチャレンジしてきたことである。これは田代島の船主たちの思考の柔軟性と技術力の賜物といえる。例えば、八興漁業は、一艘まき網、二艘まき網、マグロ延縄、鮭鱒流網、サバ一本釣、サンマ棒受網、イカ釣、ニシン刺網、北転船、沖合底曳網、カニ籠、大目流網、北まき、海外まき網など極めて多様性に富んだ漁業を展開してきた。

そして、島の男たちは島の船主のもとで、乗組員として働いた。いわば島ぐるみで遠洋・沖合漁業に精を出したのである。高齢となってリタイアした乗組員は島に戻り、小漁師として老後を送った。

通常、島の人口は農地面積に制約されるが、田代島の場合は海からの収入が多かったので、農地面積の制約を受けることなく人口は増加。戦後まもない 1955 年の人口密度は 373 人／km^2 と高かった。現在の離島の人口密度では上位 21 位に相当するレベルである。

阿部八兵衛の生家の敷地内に建つ「離れ」（左）、八興漁業の新鋭船第 36 八興丸（右）

しかし、高度経済成長期を迎える 1960 年代に入ると、船主は利便性のよい石巻本土に事務所を移す。同時に乗組員の家族も生活がしやすい本土に居を移した。かくして田代島の人口は急速に減少していった。

仁斗田の集落の高台に八興漁業の創始者である阿部八兵衛の生家が建つ。八兵衛が生まれる４年前の 1881（明治 14）年９月に建てられた伝統的建築物で、気仙沼大工の手によるという。明治 21 年に著わされた風土記（田代管見録）によると旅籠を営んでいたらしい。隣に建つ「離れ」は 1954（昭和 29）年に八兵衛（当時 70 歳）のために新築されたものであった。ちなみに建物は放置されたままであったが、八兵衛の孫にあたる達男氏（現社長）によると、近く伝統的建造物として登録されることになるらしい。なお、達男氏は中学生の時に叔父のもとに預けられて石巻の中学校に通い、その後、石巻高校に進学。会社も引き続いて石巻に拠点を移したという。つまり生家は半世紀以上も空き家になっていたことになる。

阿部いささん

集落の階段を降りていくと海に出た。海に一番近い家の庭でおばあさんが干したフノリに付着するゴミ（主として石灰藻が中心）を丁寧に取り除く作業をしていた。隣にはボイルしたヒジキも干してある。このおばあさんは阿部いささんといい、今年の５月で 90 歳になる。ご主人は牡鹿半島の給分浜の出身で婿養子に入った。いささんの１つ上で、昨年 90 歳になった。

ご主人は 1958（昭和 33）年から 10 年間、まき網漁船の乗組員として働き、その後船を降りてカキ養殖に転換、2008（平成 20）年までカキ養殖を営んでいた。77 歳を区切りにばっさりと仕事はやめ悠々自適の生活を送っているという。カキ養殖をやめるのと同時に資材等を一切合切売却していたので、震災による損失は全くなかった。

島では、男は海で働き、女は農業を営んで食料を自給していた。山の上の満蔵寺近くにまとまった田があり、また山を切り開いた段々畑もあった。1960（昭和 35）年当時の統計では、水田が 14.3 町歩、畑が 28.7 町歩と記されている。水田は天水や沢水を活用した。家で発生した人糞は肥料として山の上の畑まで運んだという。これも女の仕事だった。水田は様々で、「三つ石」は平らな田んぼで水が少ないためできた米はあまり美味くなく、「大沢」の田は排水不良の「ぬかり田」で、腰まで浸かって田植えをしたという。ただ、カキ養殖を始めてからは米の収穫期とカキ剥き作業が重なったため、米作りはやめたそうだ。

島の各家では収穫した米や麦などの穀物を部屋の中に干していた。この穀物をネズミが食べに来るため、どこの家でもネコを飼っていたそうだ。蚕も飼った時期はあったが、ネズミの食害は蚕よりも穀物の方が多かったという。

フノリはいささん自身が採取したが、隣に干してあるヒジキは仙台から島にやってきたＩターンの石川さん（震災前から移住）が採取し、ボイルしてくれたという。石川さんには津波で井戸水に海水が混ざるようになった時、大泊からタンクで水を運んでくれた。年寄りには出来ないことを何でもしてくれるので家族同様の付き合いをしているとのことだ。

いささん夫妻は２男１女の子宝に恵まれ、息子は２人とも石巻に住む。以前は漁船に乗っていたが、現在は貨物船に代わっている。娘は青森県に嫁いでいるそうだ。連休に近かったこともあり、里帰りしていた息子の家族が外出先から戻ってきた。

帰りにいささんからフノリを１袋いただいた。

いささんの家から少し上がったところにクロネコ堂という喫茶店がある。「田代島歴史資料館」という看板が掛かっていたので中に入ることにした。何も飲まないのは悪いと思い、

メロンソーダを注文。じつはこの建物は郵便局だったところで、局が廃止された後、島外からの移住者が借りて、ネコ見客相手に喫茶店を開いたものだ。郵便局時代に収集していた田代島の古い写真が壁一面に貼られていた。また島を調査に来た人たちが寄贈した調査報告書や島に関する文献資料などが置かれている。歴史資料館と銘うったのは郵便局時代の遺産を引き継いだからだ。

資料の中に関西学院大学地理研究会が 2002 年に田代島を調査した時のレポートがあった。その一部を写真撮影していると、店の女性に「写真はやめてくれ」「撮った写真は消してくれ」といわれた。店にわざわざ置いておくのは読んでもらいからであり、しかもこの資料は郵便局時代に寄贈されたものだし、店に著作権があるわけでもない。しかも数ページ分にすぎない。どういう理由で撮影を禁止するのかわからないので抗議すると、奥から男性が現れた。田尻島歴史資料館と銘打っているにしては何とも了見の狭い店でがっかりした。

フノリのゴミを取り除く阿部いささん（左）、田代島歴史資料館と表示されたクロネコ堂（右）

ヒジキ

田代島ではこの日、ヒジキの収穫の日に当たっていた。ヒジキを採る家は 10 戸ほどいるようで、浜の各所でヒジキを煮たり、干したりする光景が目についた。作業をしている人に話を聞くと、ヒジキの繁茂は震災の年は悪かったものの翌年から良好となり、その状態が続いていた。しかし、今年は一転して成長が悪く短いという。

瀬戸内海などの収量の多い産地では収穫したヒジキをそのまま天日干しにして加工業者に売り渡すケースが多い。生産者は加工の手間が省けるので楽だが、単価は安い。ところが田代島では全員がボイル・乾燥して出荷しており、付加価値を高めている。

田代島では浜の近くにドラム缶を２つに割ったゆで釜が用意され、採取したヒジキをすぐにこの釜に入れて炊く。真水を沸騰させて４～５時間ほど煮てから冷水に晒す。続いて地面にビニールシートを敷き、その上に並べて干す。燃料には廃材などが使われている。

これまでに見聞した例ではボイルに要する時間は半日ほどかけているケースが多かったが、田代島では煮る時間が短いのが特徴だ。たぶん早い段階（若いヒジキ）で収穫しているからだろう。

上述したように、島は高齢化と過疎化が進んでいるため、ヒジキ加工の関わる労働力が不足していると思われ、親戚縁者が本土側から手伝いにきている例が多いようだ。

漁協ではヒジキの共販は行っていないので、乾燥したヒジキは生産者毎に小袋に詰めて、

独自のルートで直接販売しているようだ。

収穫したヒジキ（左）、ヒジキを炊くドラム缶を半分に切った窯（右）

大型定置網

上述した通り、田代島はもともと大型定置網（地元では大網と呼ぶ）で栄えた島だった。

ところで、戦後の漁業法のもとで、定置漁業権の優先順位が定められ、地元の漁協が第１位になると、旧田代浜漁協が自営事業で定置網をやることになった。しかし漁協は定置網の経営に不慣れであったこともあり、うまくいかず、結局、定置網の経営に長けていた岩手県の業者が肩代わりした。現在は岩手県越喜来（おっきらい）を拠点とする道下漁業が経営に当たっている。漁協は名義を貸して、契約に基づき自営事業として収入を計上しているが、経営の実態は島外者ということになる。田代島に限らず、網地島や江ノ島など周辺の島の大型定置網も、同様に、岩手県の業者が実質的に経営している。

田代島には、現在、島の南西部に松石網と三石網の２つが敷設されている。震災前は田代島に乗組員の寮があり、田代島を拠点として操業していたが、震災後は牡鹿半島の荻浜に移っている。従業員は 30 人ほどいるが、田代島からの雇用はない。なお、定置網の操業は４月から翌年の１月下旬までで、冬期間は網を撤収する。仁戸田漁港の隅には道下漁業のトラックと漁網が野積みにされていた。

漁協での話では、近年、マイワシが増加しており、これに対応してタチウオやサワラも周年獲れるという。しかも単価はいいらしい。また、トラフグやマダイも多く、少し海の様子が変わってきたそうだ。

仁斗田漁港のはずれに置かれている道下漁業のトラック（左）と網（右）

田代食堂

漁港に「田代食堂」と書かれた大きな建物があった。人口 50 人に満たない島に、「島のえき」「クロネコ堂」そして「田代食堂」と３つも飲食店があるのは、ネコ見客が多く島を訪れ、それなりの需要があるからだろう。

取材を兼ねて店に入った。食べ物はカレーライスとラーメン、焼きそばとシンプルである。軽食の他には各種ソフトドリンク、生ビール、コーヒーなどの飲み物がある。それにつまみ用に焼き鳥、牛タンつくね、フランクフルトソーセージなどの既製品が提供されている。カレーライスは島の特産品であるヒジキが入る。ヒジキカレーは 800 円、これにイガイが加わると 1,000 円、ツブが加わると 1,200 円になる。ヒジキ、ツブ、イガイは何れも島の漁師が採ってきたものだ。

昼食にネコカレーを食べ、メロンソーダも飲んでいるので、アイスコーヒーを頼んだ。150 円とかなり安い。

食堂が入る建物は上述した道下漁業の乗組員の寮だった。震災時の津波で被害を受けたため、道下漁業は乗組員の寮を本土側に移したことはすでに述べた。空いた建物を修理して、昨年のゴールデンウイーク前に営業を始めた。経営母体は島の漁師が中心となった合同会社田代島水産である。社員は島の漁師で、代表は大泊の濱温さんと仁斗田の石川祐太さんの２人である。石川さんについては阿部いささんが家族同様の付き合いをしていると述べていた人物だ。２人とも島外からの移住者であるが、石川さんは 43 歳と島で一番若い（もう１人同い年のＩターンがいる）。彼は刺網や籠などの漁業を営むと同時に、島の様々な雑用、そして食堂を手掛けている。

食堂の営業時間は実質的には 11 時から 15 時ごろまで。食堂では若い男性が調理等に対応している。島外から雇われている人で、島に空き家を借りて住んでいる。店の顧客はネコ見客と釣り客がメインで、顧客が多いのは土日である。なお、食堂で飲食を提供するのとは別にネット通販も手掛けているといっていたが、帰ってから確認したところ、まだ十分に活動するには至っていないようだ。

定置網の番屋跡を利用した田代食堂（左）、食堂の内部（右）

カキ養殖

田代島におけるカキ養殖は 1968（昭和 43）年から始まっている。多い時には 12 軒がカキ養殖をしていた。上述した阿部いささんのご主人はその先駆けであった。

震災前は４経営体が営んでいたが、資材が流されたためこのうちの２経営体が廃業した。震災前のカキ養殖の生産額は４経営体で 3,500 万円ほどであった。震災から１年後に訪ねた時には新たにＩターンの１経営体が加わって３経営体がカキ養殖を営んでいた。しかし 10 年後の現在は、Ｉターンの田中こうじさんが体調を崩して島を去って横浜に戻り、もう１人も高齢のために廃業し、田代島でカキ養殖を営むのは１経営体のみとなっている。

漁港内にあったカキむき場は津波で大破し使えなくなっていたが、2013（平成 25）年度に再建され、立派な共同むき場が再生している。しかしこの施設を利用するのは１経営体のみにとどまっており、新たにカキ養殖に参入する人はいない。

田代島では、震災直後に「田代島にゃんこ・ザ・プロジェクト」によって約 1.5 億円の寄付金を集めた。この５割がカキ養殖と漁業に必要な資材購入費に充てられたから、寄付金で事業が再開できた。寄付金のうち残りの１割は猫基金、残り 4 割は事務経費に使われることになっていた。猫基金は、猫の餌の購入費、医薬品購入費、観光設備構築費、観光設備修繕費などに使われたようだ。しかしこの寄付金は使途が不明瞭なこともあり、島では評判がよくなかったとされるいわくつきのお金だった。

浜でヒジキをボイルする準備をしていた夫婦がいたので、話しかけると田代島で唯一カキ養殖をしている当人であった。カキ養殖の他に刺網や採貝藻漁業を兼業している。刺網では主にシャコ、採貝藻ではアワビ、サザエ、ウニ、ナマコ、ヒジキを採る。カキ養殖は島の東側で営まれているが、この漁場の一部は表浜のカキ養殖業者に貸しているという。カキの種苗は専門業者から購入、延縄式垂下方式で養殖している。カキのむき身作業は３人が手伝ってくれるそうだ。

カキの共同処理場（左）、延縄式垂下養殖施設（右）

防潮堤

津波は北側の仁斗田漁港と南の浜の両方から押し寄せ、仁斗田の集落内で合流した。津波の波高は防波堤先端の白い灯台の頭が出ている程度まで達したようだが、10m を越えることはなかったようだ。進入した津波は漁港内の施設を破壊し、漁港の目の前にある２階建ての建物、開発総合センターの玄関のガラスを壊し、１階部分が水没した。道路上を進入した津波は集落の一番下にある家の床上まで浸水した。

集落内への津波の進入を防ぐため、漁港と集落の境に長さ約 80m、高さ約５ｍの防潮堤が築かれている。そして防潮堤の両サイドに津波の進入を防ぐゲートが設けられている。こ

のゲートは津波警報発令の 10 分後に自動で閉鎖される。仁斗田漁港の漁港用地はかなり広いから、もたもたしていると閉鎖に間に合わなくなるような事態も予想される。とりわけ高齢者の場合は漁港内に取り残されかねない。こうした事態に対応すべく、防波堤の中央付近に階段が設けられている。したがって、逃げ遅れた人はこの階段を使うように設計されているのだが、高齢者がほとんどの田代島では果たして想定どおりに避難できるのかどうか、疑わしい。

一方、南の浜は消波ブロックがうず高く積まれて、砂浜はなくなり、美しい景観は失われた。

宮城県下全体に見られる現象だが、大泊漁港及び仁斗田漁港ともに地震により 1.5mほど地盤が沈下した。このため護岸の嵩上げ工事が実施されたが、最近になってリバウンドにより、もとの地盤高に戻りつつある。この結果、嵩上げした分だけ護岸が高くなってしまった。最干潮時には漁船と岸壁の落差が大きくなるため梯子を付けて対応せざるを得なくなっている。ところが国や県の補助事業では梯子を設置する間隔な 25mと定められているため、間隔を密にするには、自費でしなければならないらしい。

漁港内には漁船５隻、船外機８隻が係留され、陸に船外機８隻が置かれていた。反対側の港に漁船２隻係留されていたが、人口減を反映して漁船は少ない。巨額の費用を投じで立派な漁港が整備されているが、十分活用されているとはいえない現状である。

防潮堤のゲート（左）、津波の高さ以上につくられた防潮堤（右）

漁協

田代島の漁業者はもともと島単独の田代浜漁協に組織されていた。2007（平成５）年の県一漁協の発足に伴って合併し、現在は石巻地区支所に所属している。震災後、数年間は同支所の田代浜出張所として職員が常駐していたが、現在は本土側から毎週月曜日に職員が派遣され、島の組合業務に当たっている。支所は万石浦に架かる万石橋を渡った牡鹿半島の付け根に位置している。翌日、石巻地区支所に木村丈樹支所長を訪ね、田代島の漁業の概要などを取材した。

2022 年３月末の組合員数は、正が 12 人（仁斗田：９人、大泊：３人）、准が 25 人（仁斗田：17 人、大泊：８人）、合わせて 37 人である。震災後１年後に伺った時は正が 23 人（仁斗田：20 人、大泊：３人）、准が 30 人（仁斗田：17 人、大泊：13 人）だったので、正組合員は半減している。主として死亡による自然減が原因だという。

2020 年の国勢調査時の人口は上述したように 43 人、世帯数は 29 戸であったから、１戸１組合員制にすると、世帯数よりも組合員数が多くなるので、現在は島に実際に住んでいないものの住民票を残し、季節的に通勤して漁業を営む人を含んでいるのだろう。３月末の住民基本台帳上の人口は 54 人、世帯数は 40 戸であった。なお、Ｉターンの組合員は正 12 人のうち３人、准 25 人のうち２人である。

田代島で現在営まれている漁業は、刺網、籠、採貝、採藻である。若い時は遠洋沖合漁業に従事し、定年退職後に、「小漁師」として島の周辺で営むのが田代島の漁業の特徴だったので、船外機で操業するような零細な漁業しかない。なお、震災前には小型定置網が営まれていたがすでに廃業している。カキ養殖は１経営体のみとなり、大型定置網漁業は島外の業者が営んでいることはすでに述べた。

刺網は 10 経営体ほどが周年営み、主としてカレイ・ヒラメ類を漁獲している。籠は刺網を兼業する人が多く、マダコとツブを採るが、メインはマダコだ。トゲクリガニも春先と秋に籠に入るが、年による変動が激しく、今年は少ないという。

採貝はアワビ、ウニ、ナマコが対象で、箱眼鏡を使って鉤で獲る。アワビ、ナマコは 16 経営体、ウニは 12 経営体が操業している。アワビの漁期は 11～２月だが、１月中にほぼ終漁する。ナマコも同じ冬が漁期だ。ウニはキタムラサキウニで、６～８月が漁期になり、各家で塩ウニに加工して自家販売している。アワビ、ナマコは「活」で石巻魚市場に出荷する。刺網と籠の漁獲物も同様に石巻魚市場に出荷している。

採藻の対象はヒジキがメインで、フノリを少し採る。いずれも春が漁期で、ヒジキは上述したように 10 経営体ほどが営む。両方とも自家販売で、漁協は関与していない。

2021（令和３）年の水揚総額は 3,400 万円で、鮮魚とナマコが 2,500 万円、アワビが 260 万円、カキが 600 万円という内訳であった。震災前の 2010（平成 22）年の水揚総額は 4,800 万円であったから３割ほど減少しているが、組合員１人あたりにすると水揚金額はむしろ増えていることになる。

ただ、島の周辺の漁場は磯焼けが進み、ウニの身入りが悪くなっているそうで、2020（令和２）年度から水産多面的機能発揮対策の事業を活用して、ウニ駆除などに取り組んでいる。

新築された仁斗田番屋（左）、仁斗田漁港の全景（右）

島にはネコ見の観光客相手の飲食店が３軒あるが、商店はなく、郵便局も廃止されている。このため漁業用資材の調達や金融は漁協が唯一頼りにされる存在になっている。購買品は電話で注文を受け、週１回、職員が島に出かけた時に品物を渡す仕組みだ。また信用

事業の窓口業務は月２回行われており、通帳を預かって、翌日届けることになっている。

なお津波によって漁協の事務所が破壊され、組合員が集まる場所がなくなったことから、漁港用地内に石巻市の番屋整備事業の補助を活用して番屋が整備されており、組合員の会合などに使われている。震災復興のため水産庁が実施した船舶の共同利用事業は７年が経ち、漁船は個人に払い下げられている。田代地区では４隻が個人所有となったそうだ。

マンガアイランド

南の浜の先に稲荷神社がある。1106（嘉承元）年に京都からの落人が京都伏見稲荷から分掌して奉ったのが始まりとされ、後に島の鎮守社となった。鳥居の前に大漁記念の灯籠が建つ。明治 42 年の大火で焼失後、現在地に再建されたが、その後の傷みが激しく、1977（昭和 52）年に社殿を新しく建て替えている。

神社の脇の坂道を登っていくと、見晴らしのいい小高い丘に出た。この一帯はマンガアイランドという宿泊施設があるところで、2000（平成 12）年にオープンしている。東日本大震災の際、大泊集落の人々の避難先になったことは上述したとおりである。

敷地内にはちばてつやや里中満智子といった著名なマンガ家が外装や内装をデザインしたロッジが５棟並ぶ。また、ロッジの他にキャンプの設営地も用意されている。桜がちょうど満開で、キャンプ場の草地にはタンポポが咲く。海に眼をやると、網地島や牡鹿半島の鮎川などが眺望できる。のどかな場所だ。

施設の営業期間は４～10 月までであるが、いまだコロナ禍とあって、営業を自粛しているようだ。センターハウスの鍵は閉まり、付近には誰もいなかった。

マンガアイランドから山の中の道を進み、満福寺の脇を通り、集落を抜けて再び漁港に出た。

15 時 30 分発の「マーメイドⅡ」には仁斗田から 25 人ほどが乗船した。この時間帯は大潮の干潮時にあたり、大泊の漁港は水深が浅く、船が入れないため、直接、石巻に向かった。

マンガ家がデザインしたロッジ（左）、管理棟のセンターハウス（右）

【文献】
八興漁業株式会社（2018）：八興漁業 100 年の歩み.　pp. 167.
阿部勇雄（1982）：田代島むかしむかし、第１集.
阿部勇雄・三浦直美（1996）：田代島むかしむかし、第２集.
石巻市史編さん委員会（1988）：第十節田代島の民俗、石巻の歴史、第３巻、571-587.